

金子光晴とブリュッセルを歩く

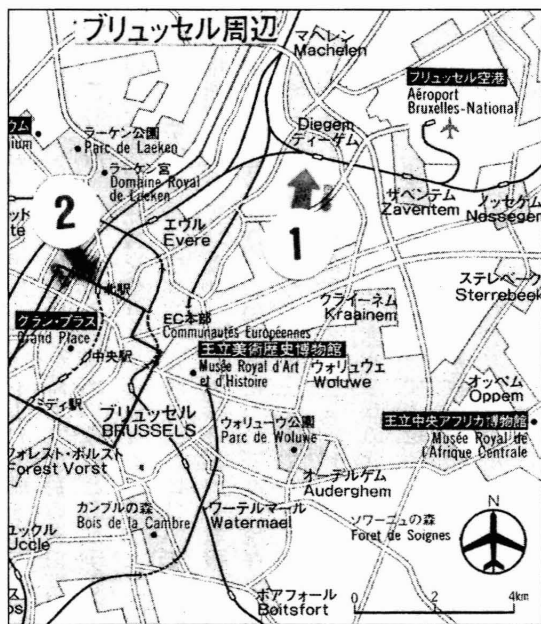
大 場 恒 明

ー ディーゲームとスカルビーク

ベルギーのナショナル・エアポートから電車でブリュッセル市街へ向かう途中、空港駅を出て数分すると車窓右手に教会が見えてくる。鐘樓の尖塔がめずらしい様式なので人目をひく。この教会の近くに、ディーゲーム(Diegem)という駅(F1の①)があつて、エアポート・エクスプレスは停車しないが、いままで何度もその駅を通過するたびに尖塔の眺めを楽しんでいたのに、このディーゲームこそ金子光晴ゆかりの地区(コミュニティ)だということに、迂闊にも気づかずにはいた。

金子光晴の足跡を訪ねてみようと思ひたち、一年ほど前、ブリュッセル北駅(F1の②)からルーヴァン行きの電車に十数分乗りディーゲーム駅で降りた。駅のそばを国道二一号と幹線道路二二号が交錯しており大型トラックがうなりをあげ連なつて走っている。駅から十分弱歩くと、教会と、近くに、金子光晴にとつて生涯忘れ得ぬ「リュ・ド・ムウラン七番地」がある(F2、3の③)。

金子光晴(一八九五〜一九七五)に「人間の底」⁽¹⁾を発売させたのがパリの都だったとすれば、詩魂に開眼させたのがブリュッセル郊外ディーゲーム(Diegem)とも表記する)だった。



(F1)

金子光晴はブリュッセルに二度滞在している。一回目は大正八（一九一九）年五月から翌年の一二月までおよそ一年半、二度目は昭和六（一九三二）年一月から翌年一月までの一年間。

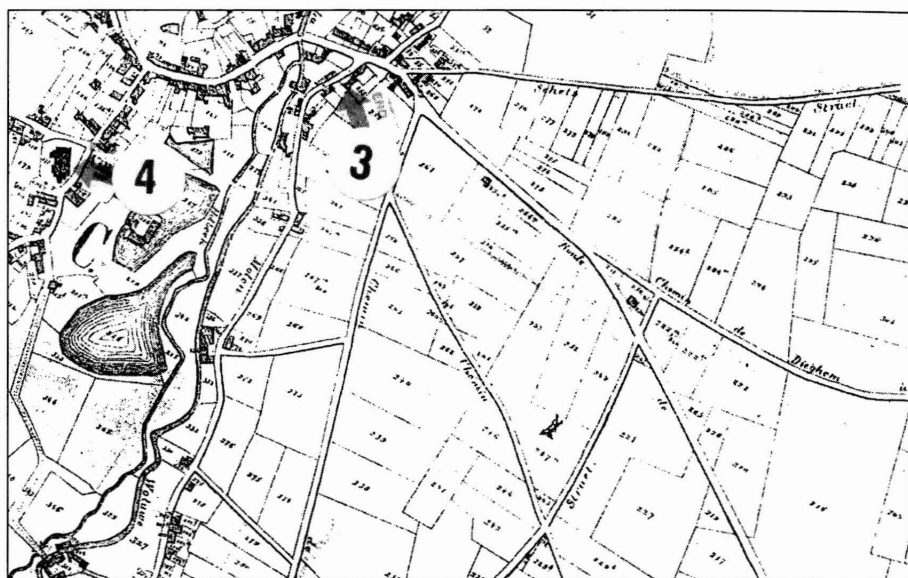
第一回目は、第一次世界大戦終結直後の欧州渡航で、鈴木幸次郎という老人と同道した。この人物は、光晴の養父と幼少時代から付き合いのあった知人で、日本と欧米をすでに十八回も商用で往復している骨董商である。二人は二月十一日神戸から出航して三月末に英国のリバプールに到着した。光晴は若年にして漢籍や江戸文化に親しんだり、浮世絵師小林清親に日本画を学び、中退したものの東京美術学校日本画科に在籍するなど、日本の伝統芸術に対する素養をもっていたので、鈴木老はそれを見込んで光晴を後継者に仕立てようと試みたらしい。有名オークションに連れ歩いたり、刀剣や浮世絵の収集家巡りをしたりしたが、ロンドンに二か月ほど滞在している間に商才の乏しい光晴に早々と見切りをつけた。光晴のほうも鈴木老とそりが合わなかったが、この人物から、日本の古美術の評価について、本筋な道に眼をひらかせてもらったのが収穫だった。⁽²⁾

二人は五月、船でベルギーのオステンデに渡った。ディーンゲムに住むヨーロッパでは名の知れた日本古美術品収集家イヴァン・ルパージュ（Ivan Lepage）との商取

引が目的だった。幸次郎はルパージュに光晴をあずけ、米国に旅立った。金子光晴はこの時も二度目の滞白期間中も、このイヴァン・ルパージュに、ありとあらゆる面において全面的な庇護を受けることになる。

異国の恩人であるイヴァン・ルパージュについて、光晴は随所で言及しているが、東京大学今橋映子教授の詳細な調査・研究により、この人物については、現在までかなり明らかになっている。⁽³⁾一八八三年ブリュッセル生まれ。光晴の十二歳上である。ブリュッセル自由大学で土木工学技師の資格をとり、妻オルガの父が経営する会社を経営して陶磁器製造事業にたずさわった。一九世紀末ジャポニスムの洗礼を受け、絵画（特に浮世絵）、彫刻、陶磁器などの日本美術品の収集家となった。光晴によると、とくに日本の根付については、全ヨーロッパで一、二の目利きで、光晴はルパージュ氏のコレクションのおかげで、はじめて周山や、一斎、岷江、右濤などの名作に接することができた。「それよりも重要なことは、氏が、ヨーロッパに対してほとんど無知に等しかった僕の眼をひらいてくれた」という人物である。⁽⁴⁾

第一回目の滞白時には、光晴はルパージュ氏の邸宅のすぐ前の、村の者のあつまる居酒屋の二階の一室に、朝のパンとコーヒーだけつけた、部屋借りの半自炊生活をするようになったが、住まいは、田舎にはよくある力



(F 2)



(F 3)

フエ兼旅籠（オーベルジュ）だった。ほぼ十年後、二度目の滞白時には、このカフェは雑貨牛酪店に変わってしまっていたが¹⁶、現在ではこの店のおもかげもすでになく、そばを流れていた小川は埋められ国道になっている。

第一回目の時はベルギーに一年半留まっていたが、この間ずっとこのカフェに寄宿していたわけではなかったようだ。ある文の中で、翌年（一九二〇）の春になって、ルパージュ家での仮装パーティーに招待され半里の道を歩いて訪問した、と書いているので、一時期、ルパージュ家から二キロほど離れた所に住んでいたこともわかるし、また、スカルピーク（Scharpeek）地区のサント・マリ

教会の近くリュ・ド・ラ・ポストに住んでいたことも、二度目の滞在記録のなかで、「サン・マリ寺院のそばから、ディーガムゆきの電車がでる。彼との交通にいちばん便利なところである。(・・・)土曜日ごとにルパ氏の宅の晩餐に招かれてサン・マリからディーガムまで出掛けていること十年前のしきたりが、また始まった」と書いてある。光晴はスカルピーク地区に転居した理由については書き残していないが、多分、周りに外食するような店もないディーゲムでの半自炊生活はなにかと不便で、食品店やレストランにこと欠かない町部のほうが当然便利だったからだろう。

ルパージュ宅の住所を、光晴は「リュ・ド・ムーラン(風車横丁)七番地」(F2の③)と書いているが、ここは、いわゆる「フラマン」地区なので、正式には当時Molen Straat といひ、現在はWatermolenstraatである。地元村人たちはフラマン語を使用するが、ここに住む町っ子である知的富裕階級はフランコフィル(フランス語使用者)なので、ルパージュ家の人々はアドレスをフランス語表示していたのだろう。ブリュッセルには「ムウラン(風車、水車)」と名のついた通りは現在も複数あってまぎらわしいが、この地名があるわけは、かつてベルギーではmeunierが製粉、製油、製紙に実用されていた、各地に多数あったためである。現在はいくつかの通

りにかつての名残を残すだけとなっているが、光晴が最初に滞在した頃には、もう使われなくなつた風車が丘の上に残骸をさらしていた時代である。水路はまだ残っていたようだが、前述したように、現在ではこれも埋め立てられて自動車道路になっている。ただし、ルパージュ宅は所有者が変わつてはいても現存する(F2・3の③)。日本美術に対する光晴の造詣は、異国で生きる彼を助け、知友を増やしもした。ルパージュ氏はサンカントネール公園(ベルギー独立五十周年を記念して一八八〇年につくられたもの)にある王立美術歴史博物館の東洋美術部門顧問をしていて、版画、掛軸、刀剣鏢の刀剣鏢の収集家や極東関係のcuratorボメル(Jules Bonmer)を光晴に紹介したり、博物館の日本美術所蔵品を彼に鑑定させたりした。それが機縁となつてブリュッセル自由大学総長から「白耳義は、日本について知りたいという意欲でいっぱいです。大学に出て一週間にたとえ二三時間でも、日本の歴史風俗習慣等の講座を作ってくれませんか」という依頼を受けたこともあった。二十代の光晴は、さすがに氣後れしたのか辞退してしまつた。後になつて、断つたことを後悔している。

光晴はひとかどの目ききであるばかりでなく、優れた画家でもあり、二度目の滞在の折、数多くの絵を制作したが、そのなかにルパージュ家の庭で家族四人を描いた

絵が残っている (F 4)。⁹¹⁾

向かって左から長女アンヌ・マリ (Anne-Marie)、次女フランシーヌ (Francine)、イヴァン・ルパージュ、妻オルガ (Olga)。これは一九三一年に描いたものだから、最初の滞在時 (一九一九〜一九二〇年) とは四人とも容姿が変わっていて、「十年前には、長身で、すらりとした紳士であったルパージュ氏は、はちきれそうに肥満して、若いのか老人なのかちよつとわからなかった。(・・・) 細君のオルガは、小猫のような人だったが、十年の歳月でこまかい皺の老が、粉雪のふりだした風景をみるよう



(F 4)

な、しずかな住しきであった。また、二人の女の兄、アンヌ・マリとフランシンは、僕よりもうわ背がある、結婚期の近い立派な娘になっていた⁹²⁾ことに、光晴はあらためて深い感慨に胸打たれる思いだった。この絵のユニークな画法がオルガ夫人には理解できなかったのか、あまりに戯画化されていると不満をもつたらしく、売りに出してしまったのを、後日、画商から買い戻した、といういわく付きのものである。背景の上空には飛行機が旋回しているが、現在も電車で数分のザヴェンテンに空港があり、離着陸する航空機が終日轟音をたてている。勿論、当時飛んでいたのは軍用機であろう。さらに、塀



(F 5)

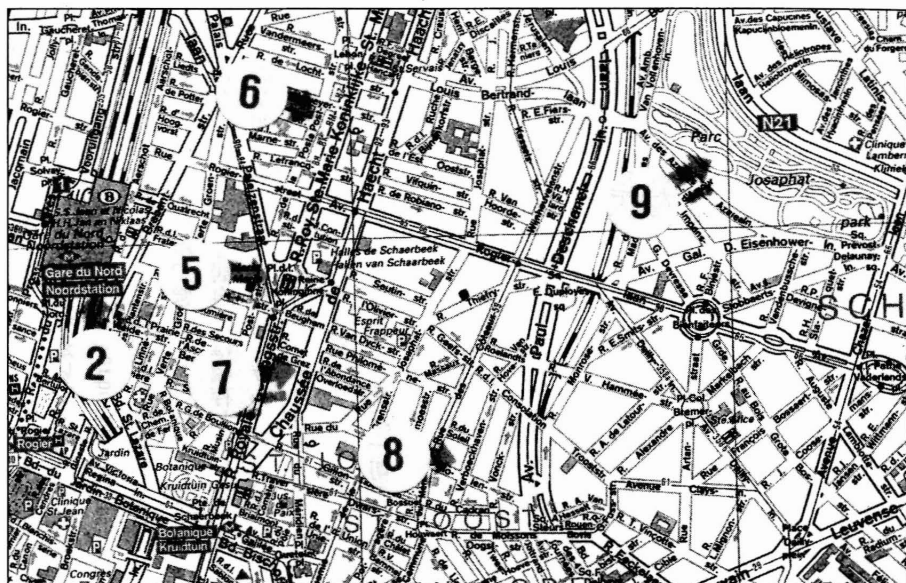
の上に遠景として見えている教会の尖塔を、光晴は「パゴダふうの塔」と言っているが、オジーヴ構造様式というゴシック建築で、ミャンマーなどの仏塔ふうな四層の尖塔が珍しい。現在の聖カタリーナ教会(St. Katharina)(F2・5の④)である。復活祭の月曜日には多くの巡礼者が聖女カトリヌに捧げる鶏や兎の供物をもって訪れる巡礼地である。九世紀建造で十七世紀までは、聖コルネリウス教会(St. Cornelius)と呼ばれていた。⁰³

前掲のF2は、金子光晴の一回目の滞在より二十年以上前、二回目の滞在より三十年以上前、つまり十九世紀末のディーゲム地区の地番付土地台帳地図の部分であるが、塗りつぶされている区画が住宅で、それ以外の大部分が農地なので、いかにその面積が広大であったか推測されよう。この時代にはすでに都市化の侵食が進行していて、それが、ヴェルハーレンの詩集『触手ある都会』(一八九五年)などの詩的テーマだったわけだが、この都市化現象は金子光晴が滞在していた一九一九〜二〇年、一九三一年ごろには、いっそう急速に進行しつつあった。ディーゲム地区の農耕地と人口の増減を示す統計をみると、全農地については、一八三四年に五〇五ヘクタールだったのに対して一九五九年には一八四ヘクタールに減少している。人口の変動は、この農地の減少動向と相関

を示していて、一八四六年に一一〇七名だったのに対して一九六一年には四四五一名に増加している。少々ラフな言い方をすれば、一二〇年ほどの間に農地が三分の一を超える減少を示しているのに反比例して人口は約四倍に増加している。現在はルパージュ宅があった周辺地域は都市化の波に完全に呑み込まれて、町部と変わりない住宅地になっているが、金子光晴が滞在していた時代には、農地の右肩下がりと人口の右肩上がりとの動向が急速に進行中ではあっても、まだ、ヴェルハーレンの詩集にえがかれているブラバンの田園風景は、かなり残っていたのだろう。

前述したように、光晴はディーゲム地区のほかにスカルピーク地区のリュ・ド・ラ・ポストにも住んでいたが、スカルピーク地区はブリュッセル中心街からほど近い、起伏の多い一廓である。サント・マリ教会(F6・7の⑤)の正面を左折してやや長い坂を下っていくとブリュッセル北駅(F1・6の②)がある。鈴木老人と光晴がオステンデから北駅に着き、ディーゲムに向かうため乗り換えた「郊外電車」、そして、光晴がよくルパージュ宅に通った電車は、現在のルーヴァン方面行きの路線を走っていたのだろう。

ほぼ十年後、二度目にルパージュ氏と再会したのは、妻でありファム・ファタルである森三千代と上海、香港、



(F 6)



(F 7)

東南アジア、パリと、旅費・生活費を日々稼ぎながら、幼い息子乾（けん、佐藤紅緑が名付親）を三千代の親元にあずけての、惨憺たる「地獄巡り」の果てであった。この時には、前後に計約一年八か月におよぶ上海、香港、東南アジア各地の放浪を伴い、日本を出てから神戸に帰りつくまで計三年九か月を費やした。

住まいについては、かつて寄宿したディーゲムのカフェがなくなっていたので、ルパージュ氏は、サント・マリ教会の近くのリュ・ド・ラ・ポスト一八三番地（F 6・7の⑥）に部屋を借りてくれた。この時は、一年間の滞在中、光晴はスカルピーク地区内で二度転居してい

る。一回は *Chausée de Haecht* 一三番地(光晴は *Rue de l'Haecht* と書いているが記憶違いであろう)(F 6・7の⑦)へ、もう一回は *Rue de Verboockaven* 二三番地(F 6・7の⑧)へ。光晴に番地の記憶違いや誤記がない限り、当時のその住所で営まれていた八百屋や洗濯屋はすでにないにしろ、住居自体は現存している。ルパージュ氏の父親はかつてスカルビーク地区の助役 *Echevin* という行政中枢にいた人なのでコネにはこと欠かなかったのだろうが、光晴はほとんど無一文の身の上だったのだから、家賃等をふくめルパージュ氏が一切の面倒をみてくれたのだろう。

ルパージュ氏は、日本に帰国する旅費すらない光晴のために、ブリュッセルの「ノ・パントル(*Nos Peintres*)」画廊で光晴を含む四人の画家の作品展を開催し、売れ残ったものは、ひそかに自分で買取り船賃をつくってくれた。このおかげで、ルパージュ氏の手許に画家金子光晴の絵が保管された。

光晴の人柄、画家としての才能、日本古美術に対する造詣を高くかったことだろうが、ほとんど信じがたいほどのルパージュ氏の好意であった。⁹⁾

森三千代はアントワープやパリに仕事をもっていたので、ブリュッセルで光晴といっしょに住むことは多くなかったはずだが、それでも二人でルパージュ家の人たち

と交流したり、ワートルローや古都やシャトーなどへの観光のエクスカージョンをすることもあり、この場合もルパージュ氏は二人のためにみずから自動車を運転することが多かったようだ。

スカルビーク地区の東はずれにあるジョザファ公園への道は二人の散歩コースだったが、この公園には彫刻家 *ルイ・マスケレ* (*Louis Mascré*) 制作の *エミール・ヴェルハーレン* 胸像(F 6・8の⑨)がある。ヴェルハーレンが、生前、親友の画家 *コンスタン・モントアルト* (*Constant Montald*) のアトリエを訪れるたびにこの公園を通っていた、というゆかりを光晴が知っていたかどうかはさだかでない。



(F 8)

二 エミール・ヴェルハーレンとの出会い

金子光晴はディーゲームでの生活について、「もつとも生甲斐ある、もつとも記念すべき期間となった。古ブラバント侯国領の豊かな田園ですごした月日は、僕のその後の人生を決定したといつてもいい」⁽¹⁶⁾と言っている。そして「白耳義をえらんでそこに二年近くの歳月を逗留したのも、ヴェルアアランを誰よりもしつかりとつかんで我身につけようという野心からであつた」⁽¹⁷⁾と、鈴木幸次郎に勧められて渡欧する気になったとき、ベルギー滞在が目的だったかのような説明をしているが、どうも、それは後からの理由づけ、というのが実情で、最初からベルギーに留まろうとしていたわけではなかったようだ。はじめはパリにでも行こうか、と漠然と考えていたらしい。金子光晴は処女詩集『赤土の家』(大正八年)を自費出版したばかりだった。この作品について、光晴は、ホイットマンやカーペンターの高波のように押し寄せたデモクラシー思想に心酔し、富田碎花、百田宗治、井上康文などの「民衆詩」運動にあおられ、「はしか熱」にかかり「うわ言のように書きなぐったもので、勿論、しつかりした鑑識もなく、技倆も未熟で同時代の平均レベルにも程遠いしろものであり、まことに若気のいたり」⁽¹⁸⁾で、「自分のリズムがない」「汚点」⁽¹⁹⁾と、後年きびしい自己評

価を下しているが、要するに、この時点ではまだ詩人としての資質に確信がもてないでいたことであろう。むしろ、いつさいを清算して、いわゆる「自分さがし」の旅に出るつもりだったのではないだろうか。「自分に嫌気がさして、はじめて外国に旅立った。出世の蔓をつかむ気もなかったし、異国の景色人物をみる興味も、もうそれほど強いものではなかった。(・・・)どこかで食いちがいのある文学青年たちと話をあわせる生活に、つくづくたびれてしまった」⁽²⁰⁾というのが本当のところだったろう。ロンドンからベルギーに移ったときも、「ベルギーになんの馴染みもなかったが、鈴木老と一日も早く袂をわかつて一人になりたかった」⁽²¹⁾ために「ディーゲームに留まった、と言っているくらいだ」。

しかし、ヨーロッパ文化に眼を開かせてくれたルパージュ氏と、ディーゲームの自然が心身を癒し活力を回復させてくれることになり、光晴は「はじめて詩の勉強を始めた」⁽²²⁾。そして、かつてのホイットマン熱が誘因となって「ヴェルハーレンの詩にとりついた」⁽²³⁾。

ヴェルハーレンは金子光晴が渡欧する三年前、大戦のさなか、鉄道輪禍にあい世を去っていた。金子光晴は、大正期におけるヴェルハーレン移入を主導した川路柳虹や民衆詩派の詩人仲間から、『赤土の家』時代にすでにヴェルハーレンについての情報を得ていたはずであるが、

ディーゲームの田園地帯は、肉体と五感を通してヴェルハーレンの詩の精髓に導いてくれた。当時について光晴は、

「僕の読書はそこで、ヴェルハーレンの詩集からはじめることにした。二十冊ばかりの全集が、狭い部屋の机のうえに並ぶ。(・・・)ヴェルハーレンから学んだものは、大きな骨格と、ふかい息であつた。僕の住んでいるその場所が、ヴェルハーレンのえがいてある地方で、風車も藁塚も、ビスケット色の小舎も、麦穂にまじつて揺れる野生の矢車草も、寺院の塔も、百姓も、百姓の娘や、子供や、老父も、詩集のなかからそのままとりだされて、現実の世界に配置されたもののようである。僕は、手を取られるようにして、息のかよつた表現の秘密をそこで教えられた。そして、僕は、おなじものを書くこうと焦慮した。実際にはなかなかうまくゆかなかつたが、この期間の詩作で僕は、日本で書いていた詩の方法を少しずつ脱皮し、改めていった」と回想する。

金子光晴が滞在していた時代には、ディーゲーム地区の農地と住宅の様子は、F2の地図とはかなり変化し、都市の侵食が急速に進行中だつたはずだが、それでもまだ、大地のリズムと五体のリズムとの共振なしに詩は鳴り出さないことを教えてくれる環境は残っていたのだろう。

毎晩のようにルパージュ氏のもとにでかけていつては日欧の芸術を語り、午前中はヴェルハーレンの二十数冊の詩集にしたがつて、「自分の詩作のなまちよろいところを根本からたたき直すことに一身をうちこんだ。」⁸⁵午後には、ヴェルハーレン詩篇の世界であるディーゲームの田園を散策し、その豊饒な自然のリズムを五感で感得して、ディーゲーム滞在中に「それを何十篇かの詩にした。」⁸⁶金子光晴がヴェルハーレンから受けた影響について「大きな骨格と、深い息であつた」とか「直接彼の詩ではなく、その詩の根底をなす多くのものに、ふかい影響をこうむっている」と証言しているが、光晴ははじめて詩的創造というものに開眼したのであつた。

さらに、ヴェルハーレンという入り口から、ヴェルレーヌへ、ボードレールへ、バルナツシアンへ、ロマン派へと、詩史の流れを逆にさかのぼり、フランス近代詩の勉強を進めたことが、金子光晴の詩的世界を大きく、奥行を深くする結果になっていると言えるだろう。帰国するころには「ヴェルハーレンのリズムは、いかにも空虚で、よそよしいものにひびいてきた」⁸⁷のも、光晴の詩的成熟のあらわれであつたのだろう。帰国の船上からディーゲームで書き溜めた詩稿の多くをペルシャ湾に捨てた、というエピソードは有名だが、それでも手元に残つた詩篇が『こがね蟲』(大正十二年)となつた。

この詩集は光晴の第一次ヨーロッパ体験、とくにディーズゲーム滞在の成果で、イヴァン・ルパージュに捧げられているが、硬質の美学と幻想的色彩で構成された「金碧燦爛の世界」は、ヴェルハーレンというよりは高踏派の感性のほうがまさっている。ただ、詩集中、とくに「Monsieur Ivan Lepageに捧呈」と付記された「鐘は鳴る」という詩篇は、詩魂をはぐくんでくれたディーズゲームの大地に捧げた七聯一一七詩行におよぶ長詩であるが、「鐘は鳴る。鐘は鳴る」というリフレインに、自然の息づかいの律動が呼応し、立体的にドラマのように展開しているのはヴェルハーレンの世界にほかならない。この詩集は、ヴェルハーレンと高踏派の複合的影響によって生まれた作品というべきだが、ヴェルハーレンの影響として特定できる部分の分析的確認が課題だ。

『金子光晴全集』第二巻の後記で、秋山清は「耽美耽奇への好みと自由の追及、若年の日からこれが金子光晴を詩人として聳え立たせた二本の柱であった。その姿は初期の『こがね蟲』のときから生涯かわるときはなかったのである。(・・・)金子光晴においてそれは二つにして一つ、不可分のものでしかなかった」と書いているが、金子光晴の詩は、生の底に据えた視座から発する肉声を、構造化された彼の美学が造型したウーヴル・ダールである。彼は詩人であるばかりではなく画家であったことと

無関係ではないのだが、一見、天衣無縫であるように見えながら、ものを視て表現するという一連の操作が美学的「構造」と無縁に行われることはない。

表現しようとする精神を盛るための道具としての建築、美学的シンメトリーが「詩型」で、詩語一つ一つの色調、音響の軽重の重なりとニュアンスが、全体の序破急を作りあげる要素となる。さらに行数と行間の空間、行の長さとの音響効果、陰影効果、色彩効果が詩という大伽藍を築きあげる一本一本の楔を利かせることになる。詩語一つのなかにも詩人の全天地が包まれる。どんな破格のなかにもシンメトリーが内蔵され、二行の詩にもカテドラルがある。劇的变化抑揚というリトムの快感が詩の「骨子」であり、詩人の精神的自身が骨格となる。こうした詩の構造は光晴がヴェルハーレンから学んだものであり、ヒントは彼の長詩のなかにあった。³³

『こがね蟲』が詩壇で注目を集めはじめていた矢先、関東大震災が光晴の新しいスタートに水をさした。

森三千代との結婚、乾の誕生、多数の詩人たちとの錯綜した交流、作詩活動、生活苦という身辺騒然たるなかで、百田宗治、佐藤惣之助と自宅で行った週一回の「ヴェルアーラン研究会」でレクチャーをかってたりした。³⁴光晴は三富朽葉などと同じく暁星校出身者だが、落第を二回したと言っているくらいだから学業ぶりは想像でき

るのであるが、フランス語のほうもあまり折り目正しい使い手ではなかったようだ。ベルギーでルバージュ氏や多くの人々とフランス語での交流があったわけだが、彼の滞在記のカタカナ表記されたフランス語彙を見て、光晴のフランス語（とくにその発音）は天衣無縫で、かなりのブローケンであつたことが伺える。

この金子光晴がヴェルハーレン詩篇を多く翻訳し、その総数は約七十篇にのぼり、その数は高村光太郎に次ぐ。光晴の息子である森乾氏が「大正十四年の三月に僕のおやじが新潮社から、『泰西名詩選集』の一巻として、『ヴェルハーレン詩集』というものを出している。おそらく僕が生まれるというので、その出産費用のために大急ぎではじめた仕事らしく、おやじの甘い友人たちは、誤訳がかえって面白いなどと、変ななぐさめかたをしたものだそうだ」と書いているが、光晴の翻訳法は、高村光太郎と同じく、原詩の全体をまずつかみ、自分の呼吸で訳していく、「読んで意味のよくわかること、気持よくよめることが（・・・）一番大切なことと思つてゐる自分は、逐字訳だとか、むづかしい考証的な感情をすべて捨ててしまった。殊に、語学ときたら貧弱な自分だから、コマコマした誤りはあらかじめ許してもらつて、先づ、原作者の詩が、どんなものであるかを呑みこめることを肝要として」訳すというやり方である。

森乾氏が言及している大正十四年の『ヴェルハーレン詩集』の前に、光晴は、大正十一年日本評論社出版部が出した『泰西社会詩人詩集』のシリーズのなかに「エルハアラン詩抄」を訳している。もつとも、これは表向きは百田宗治訳となつてゐるのだが、百田宗治ではヴェルハーレン詩篇を訳すのは荷が重過ぎるのは明白で、光晴が代訳したものと思われる。百田宗治はこの翻訳書のなかで代訳者として光晴の名を明記している。大正十四年の翻訳に続いて同年八月、紅玉堂の『近代仏蘭西詩集』のなかにヴェルハーレンの五詩篇を、昭和二年、飯塚書店の『世界解放詩集』のなかに一詩篇を収めている。

金子光晴が二度目にブリュッセル滞在をはしたのは、最初の希望に満ちた生活とはまったく異なり、パリで、男娼と乞食のほかは、ゆすりたかりまがいのことを含めありとあらゆることを生きんがためにし尽くし、この「地獄巡り」のなかで「人間の底」を見極めてしまった果てに、万策尽き果てての、いわば逃避行であつた。パリと西洋文明に対して、考えられる限りの悪態をつき、呪詛を投げつけた光晴の詩魂のなかで聞こえていたのは、もはやヴェルハーレンの人間賛歌の朗々たるリズムではなく、娼婦が洗面器にまたがつてたてる「しゃぼりしゃぼり」という音であつた。「肯定的なんか糞喰えたつた。そのことに今も変わりが無い。ホイットマンや、エミール

ル・ヴェルハアランに心酔していた僕が、その二人を敵に廻した⁸⁸と光晴が書いたのは、昭和二十六年だが、すくなくとも光晴の「否定の精神」をのせる詩という容れものを、かつて、最初に鳴らしてくれたのはヴェルハレンだったのだ。

△注▽

- (1) 『金子光晴全集』第十二巻、中央公論社、昭和五十年、六〇頁（『絶望の精神史』）。以下『全集』と略記。
- (2) 『全集』第六巻、一三九頁（『詩人』）
- (3) 今橋映子『金子光晴旅の形象・アジア・ヨーロッパ放浪の画集』（平凡社、一九九七年）一五四〜一五六頁
- (4) 『全集』第六巻、一四〇頁（『詩人』）
- (5) 金子光晴『フランドル遊記』（平凡社、一九九四年）九頁
- (6) 『全集』第十五巻、二七一頁（『雑纂・子供舞踏会の夕』）
- (7) 『全集』第七巻、三二五頁、三三二頁（『ねむれ巴里』）
- (8) 『全集』第六巻、一四〇頁（『詩人』）
- (9) TAKAGI Yoko, *Japonisme in Fin de Siecle Art in Belgium*, Pandora, Cahier 9, Antwerp, 2002, p. 64
- (10) 『全集』第八巻、三六一頁（『随想拾遺・大学の講義を頼まれ』）
- (11) 今橋映子、前掲書、一五一頁
- (12) 『全集』第七巻、三二五頁（『ねむれ巴里』）

- (13) Credit Communal de Belgique, *Communes de Belgique, Dictionnaire d'histoire et de géographie administrative*, 3, Flandre ; La Renaissance du Livre, 1981, p. 1915
- (14) Atlas Cadastral de Belgique, Province de Brabant, *Plan Parcellaire de la Commune de Biégem, avec les Mutations*
- (15) 今橋映子、前掲書、「一九四〇〜四五五年の第二次世界大戦の折、ドイツ軍の強制労働に召集されようとしていた自分の会社の従業員たちを守るために、必死で奔走したという——それはイヴァン・ルバージュ氏の人柄を何よりも物語る証言である。大戦後一九四七年九月、彼はディーゲームの地にて六十四歳の生涯を閉じた。」（一五六頁）
- (16) 『全集』第六巻、一四〇頁（『詩人』）
- (17) 『全集』第八巻、四三二頁（『随想拾遺、ヴェルハアランとの出会い』）
- (18) 『全集』第十三巻、一五一頁（『文学的断想、処女詩集出版の頃』）
- (19) 『全集』第一巻、一二八頁（『赤土の家』）
- (20) 『全集』第十二巻、六三頁（『絶望の精神史』）
- (21) 『全集』第六巻、一三九頁（『詩人』）
- (22) 『全集』第十三巻、二〇頁（『文学的断想、私と詩』）
- (23) 『全集』第六巻、一四一頁（『詩人』）
- (24) 前掲書
- (25) 『全集』第八巻、四三二頁（『随想拾遺、ヴェルハアランとの』）

出会い)

26 『全集』第六巻、一四一頁(『詩人』)

27 前掲書

28 『全集』第八巻、四三二頁(「随想拾遺、ヴェルデアランとの出会い」)

29 『全集』第六巻、一四二頁(『詩人』)

30 『全集』第一巻、二〇九〜二七頁(「こがね蟲」)

31 『全集』第一五巻、六二頁(「拾遺、詩の作り方」)

32 『全集』第二巻、三六七頁(「秋山清」後記)

33 『全集』第八巻、四一四〜四二〇頁(「随想拾遺」、第十三巻、七八〜七九頁(「文学的断想、僕の詩—私の詩作について」、第十五巻、八〇頁(「拾遺、詩人の皮膚と心」)

34 『全集』第六巻、一五五頁(『詩人』)

森乾「ヴェルハレーンと日本人」(「本の手帖」昭和三十九年十月、六四八頁)

35 森乾、前掲書、六四五頁

36 『全集』第十四巻、七頁(「プエルハアレン詩集」緒言)

37 『全集』第二巻、二七四〜二七五頁(「女たちへのエレジー」、

「洗面器」)

38 『全集』第十三巻、一四五頁(「文学的断想、戦争中の詩、その他二、三」)

金子光晴の世界は広大だ。比較文学的研究をめざし

遅々たる歩みを続けてきたが、日暮れて道遠し、いまだ基礎作業の域を出ない。忸怩たる思いをいかんせん。されど、もはやこれまで。

最初の研究対象アンドレ・ジッドがベルギー詩人ヴェルハレーンと親友だったということもあり、研究歴の後半は、日本近代詩の成立と展開に寄与したこの詩人の研究にシフトして、プリユッセル通いをするが多かった。この間、多くの人々から受けた支援を忘れ得ない。

現地でなければ出来ない研究の機会を、本学在外研究制度によって、一年間も与えてくれた経営学部教授会に感謝しなければならぬ。

貴重な誌面を割いて、つたない研究成果を掲載してくれた「麒麟」にお礼申しあげる。主幹復本一郎教授はじめ同人各位から多くの学問的刺激を受けることがなかったら、とぼとぼたどったこの道はもつと蕭条たるものとなっていたにちがいない。

「麒麟」よ。学的営為よ。いやさかを祈念しつつ攔筆せん。さらばじゃ。